様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３１３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０２０８

研究課題名（和文）看護学生が修学・学習の困難に直面するリスクを可視化する試み

研究課題名（英文）A study to identify factors that make college life difficult for nursing students

研究代表者
渡邊　生恵（Watanabe, Ikue）

東北福祉大学・健康科学部・准教授

研究者番号：３０３２３１２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：看護学生のどのような要因が学習上の困難や退学のリスクにつながっているのかを明らかにするためにインタビュー及び質問紙調査を行った。1年次前期の入学満足度は、1年を通して退学意向に関連しており、退学のリスクを予測する指標になりうることが示唆された。困り事・悩み事のある学生は、大学に行きたくないという思いを抱えている可能性も示唆された。レジリエンス得点が高いほど困り事・悩み事は少なかったことから、具体的に問題を解決するためのサポートだけでなく、レジリエンスを高められるようなかかわりの検討も必要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
看護系大学・学部において多様な進学者が増えている一方、看護系大学入学者に対する卒業者の割合は95%程度であり、毎年一定数が何らかの理由で学習を継続できなくなっている。今回の結果から、中途退学に至る前に学生が困難を克服し、学習を継続できるようなサポートを行う上での示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：An interview and questionnaire survey was conducted to determine what factors contribute to nursing students' learning difficulties and risk of dropping out of school. Enrollment satisfaction in the first semester of the first year was related to the intention to drop out throughout the year, suggesting that it may be a predictor of the risk of dropping out.It was also suggested that students with problems and worries may not want to go to college.Since higher resilience scores were associated with fewer troubles and worries, it was considered necessary not only to support students to solve specific problems, but also to support them to increase their resilience.

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護学生　困難感　中途退学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

看護師学校・養成所（大学・短期大学・専修学校・養成所・高等学校）の入学定員は、大学においては 2002 年の 13.1%から 2019 年の 35.8%に増大している。また国内の大学進学率は 2009 年には 50%を超え、看護系大学・学部においても多様な進学者が増えている。

看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査では、看護系大学入学者に対する卒業者の割合は 95%程度であり、それ以外は卒業延期あるいは中途退学していると見られる。他の種類の養成機関に比較すると低い数値であるが、毎年一定数が何らかの理由で学習を継続できなくなっていることが分かる。

看護学生が認識している学習上の困難についての報告[1)]では、高校との教育内容の違い、レポートの書き方がわからない、授業変更など情報収集が必要、家事・アルバイトとの両立、など、他学部と共通する内容と、演習記録や技術の自己学習への取り組み方がわからない、課題が多い、グループワークへの不慣れ、各科目と看護学の関連性がわからない、看護に関する学習意欲・動機づけの違い、など看護学生に特徴的な内容とがあげられている。一方、教員から見た看護学生の特徴としては、看護志望ではない学生の増加、読み書きや理解力低下、一般常識の低下、患者をイメージできない、手先が不器用、などがあげられている[2)]。これらは演習や実習における困難を引き起こす原因になりかねない。

また、高校時代の学習指導法と大学生の自己教育力(自ら学ぶ力)との関連が報告されており[3)]、高校までの学習習慣が大学入学後の学習に影響し、学習上の困難の程度に影響することが推測される。生活習慣と学習との関連については、看護学生を対象とした調査[4)]において、充実した生活習慣を持つ学生は、学習方法を自身で調整しながら進めていく能力が高いという結果が得られている。

２．研究の目的

以上より、看護学生の就学・学習の困難には、入学までの学習習慣や生活習慣、現在の学習・生活などが複雑に影響し合っていると考えられる。本研究は、就学・学習において困難感を感じている看護学生の、どのような要因が現在の困難につながっているのか、またそれを克服する要因は何か、あるいは克服を困難にする要因は何かを明らかにすることを目的とする。これにより、学生が学業不振や学校生活不適応から中途退学に至る前に、大学・教員が必要なサポートを行うことにつなげたい。

３．研究の方法

（1）インタビュー調査

看護大学生を対象に、看護学生として就学・学習する上での困難と克服方法についてインタビューを行い、質的に探索し記述した。

①研究デザイン：質的帰納的研究デザイン
②調査期間：2018 年 10 月～2022 年 3 月
③データ収集法・分析方法：

インタビューガイドを用いた半構成的面接法により行い、録音内容を逐語録として文字化し、質的に分析した。分析は複数の研究者で行い、信頼性・妥当性を確保した。

（2）質問紙調査

看護大学生を対象に、2 度の質問紙調査を実施した。

①研究デザイン：縦断調査
②調査期間：2022 年 7 月および 2023 年 1 月
③データ収集法・分析方法：

2022 年度に入学した看護大学生 86 名を対象に、自記式質問紙による調査を 2 度実施した。1 回目調査は前期授業終了時、2 回目調査は後期授業終了時に行った。2 度の調査に回答し、回答者本人が作成した ID により同一人物であることが確認できた回答を分析対象とした。質問内容のうち、困り事・悩み事の有無に関する項目については、事前のインタビュー調査の結果および看護学生の就学・学習上の困難に関する先行研究[1) 2) 4)]をもとに作成した。実際の教育活動で役立てられる内容とするため、学生との面談などで確認できるような内容を質問項目に設定した。

1 回目の調査票の内容は、年齢、性別、生活形態（家族と同居・一人暮らし、など）、現在の学科への入学についての満足度（以下、入学満足度）、入学の希望一致（現大学・学科への入学が希望通りであったか）、進学先決定方法（自分の希望か否か）、高校までの学習環境、入学前の関心分野（看護学か否か）、入学前後での看護イメージの変化（以下、看護イメージの変化）、現在の自分の学習状況や成績についての自覚（以下、成績の自覚）、規則的な生活（規則的か否か）、身体面・心理面の状況（以下、心身の状況）、困り事・悩み事（13 項目）、相談相手の有無、二次元レジリエンス要因尺度[5)]、自己調整学習方略尺度[6)]、欠席の状況（行きたくないときがある、行かなくてもよいと思うことがある、特に理由もなく欠席・遅刻することがある）、退学の意向（大学を辞めたいと思ったことがある）、であった。

2 回目の調査票の内容は、生活形態、入学満足度、看護イメージの変化、成績の自覚、規則的な生活、心身の状況、困り事・悩み事（13 項目）、相談相手の有無、二次元レジリエンス要因尺度、欠席の状況、退学の意向、であった。

欠席の状況、退学の意向、困り事・悩み事点数と、そのほかの各要因とのχ2 検定あるいは相関を分析した。

４．研究成果

（1）インタビュー調査

インタビュー協力者は 11 名であり、男性 2 名、女性 9 名、1 年生 1 名、2 年生 4 名、4 年生 6 名であった。入学時から卒業前までの様々な時期における人間関係形成に関する内容、学習への取り組みに関する内容などが語られ、困難を感じた経験とそれにどのように対処したのかについて明らかとなった。

（2）質問紙調査

対象者 86 名のうち、1 回目調査回答者は 74 名、2 回目回答者は 76 名であった。2 度の調査に回答し、回答者本人が作成した ID により同一人物であることが確認できた対象者は 61 名であり、これを分析対象とした。61 名のうち 19 歳以下 60 名、20 歳以上 1 名、女性 57 名、男性 1 名、性別に無回答 3 名、高校新卒 60 名、それ以外 1 名であった。

1 回目の調査（1 年次前期授業終了時）で「大学を辞めたいと思ったことがある」と回答した学生は 4 名であり、「大学に行きたくないときがある」は 23 名、「大学に行かなくてもよいと思うことがある」11 名、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」1 名であった。「大学を辞めたいと思ったことがある」、「大学に行かなくてもよいと思うことがある」については、この時点での入学満足度および入学前の関心分野との関連がみとめられたが、困り事・悩み事の点数やそのほかの要因との関連はみとめられなかった。一方、「大学に行きたくないときがある」、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」については、各要因との関連はみとめられなかった。困り事・悩み事の点数は自己学習調整方略のうち努力調整方略と弱い相関がみられ、困り事・悩み事があるほど努力調整方略の点数が低くなっていた。また獲得的レジリエンス要因得点との相関もみられ、獲得的レジリエンス要因得点が高いほど困り事・悩み事が少なくなっていた。自己学習調整方略のうち努力調整方略は、自身の学習活動への動機を高める方略である[6)]。困り事・悩み事の内容と合わせて学習への取り組み方へのサポートも必要である可能性がある。また獲得的レジリエンスは問題解決志向・自己理解・他者心理の理解という下位尺度を含んでいる[5)]。具体的な困り事・悩み事の解決のためのサポートも必要であるが、レジリエンスを高められるようなかかわりにより、この時期の困り事・悩み事を軽減できる可能性も示された。

2 回目の調査（1 年次後期授業終了時）で「大学を辞めたいと思ったことがある」と回答した学生は 5 名であり、「大学に行きたくないときがある」は 25 名、「大学に行かなくてもよいと思うことがある」11 名、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」5 名であった。前期授業終了時の入学満足度は、後期授業終了時点での「大学を辞めたいと思ったことがある」、「大学に行かなくてもよいと思うことがある」、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」に関連しており、さらに後期授業終了時での入学満足度も「大学を辞めたいと思ったことがある」に関連していた。前期授業終了時点での入学満足度が後期の欠席や退学意向にまで影響しており、後期での入学満足度も退学意向に影響していることから、入学満足度は 1 年次の学生の退学リスクの指標になる可能性があることが示唆された。「大学を辞めたいと思ったことがある」、「大学に行かなくてもよいと思うことがある」、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」はそれぞれ互いに関連しており、実際に欠席がある場合には退学のリスクもあるといえる。

また、後期授業終了時の入学満足度と困り事・悩み事の有無が「大学に行きたくないときがある」に関連していたが、「大学に行きたくないときがある」と「大学を辞めたいと思ったことがある」、「特に理由もなく欠席・遅刻することがある」とは関連しておらず、この時点で困り事・悩み事を解決しておくことが退学のリスクに移行しないためには大切であると考えられた。後期授業終了時の困り事・悩み事の点数は獲得的レジリエンス要因得点および資質的レジリエンス要因得点との相関もみられ、各レジリエンス要因得点が高いほど困り事・悩み事が少なくなっていた。

本研究では、学生の中途退学や休学の予防につながるよう、学生との実際の面談などでも確認できるような内容を質問項目に設定し調査を実施した。1 年次の前期での入学満足度は、1 年を通しての退学意向に関連しており、退学のリスクを予測する指標になりうる。「あなたは本学・本学科に入学したことについて、現在満足していますか」という質問であり、学生との面談などでも確認が可能である。入学満足度を低くしている要因も確認し学生のサポートを行うことが有用であると考える。また困り事・悩み事のある学生は大学に行きたくないという思いを抱えている可能性も明らかとなった。レジリエンス得点が高いほど困り事・悩み事は少なかったことから、具体的に問題を解決するためのサポートだけでなく、レジリエンスを高められるようなかかわりが、学生自身が困り事・悩み事を克服して学生生活を継続するために有用である可能性が考えられた。

1)大久保暢子、ほか：看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討、聖路加看護学会誌、15 巻、1 号、9-16、2011.

2）安ケ平伸枝、ほか：基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫、聖路加看護学会誌、14 巻、2 号、46-53、2010.
3)森敏昭、ほか：大学生の自己教育力と高校時代の学習指導法の関係、広島大学大学院教育学研究科紀要、51 号、1-8、2002.
4)餅田敬司、ほか：看護系大学生の健康度・生活習慣と自己調整学習方略の関係の検討、聖泉看護学研究、2 巻、83-88、2013.
5)平野真理：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み 1）－二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成、パーソナリティ研究、19 巻、2 号、94-106、2010.
6）藤田正：大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係、奈良教育大学紀要、59 巻、1 号、47-54、2010.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鎌田　美千代 (Michiyo Kamata) (90626219)	東北福祉大学・健康科学部・講師 (31304)	
研究分担者	二瓶　洋子 (Yoko Nihei) (90468322)	東北福祉大学・健康科学部・講師 (31304)	
研究分担者	杉山　敏子 (Toshiko Sugiyama) (90271957)	東北福祉大学・健康科学部・教授 (31304)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関